

3

第3章 大学での学習

第1節 大学生の学習状況

杉谷祐美子

授業への出席状況

大学教育に対する選好

大学での授業への取り組み

定期試験・レポートの準備期間

授業の経験

成績

第2節 大学での学習成果

山田剛史

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

資料編

序章 大学生調査の実施とその活用に向けて

第1章 大学入学までの実態

第2章 大学生活について

▶ 第3章 大学での学習

第4章 大学卒業後の進路

第5章 大学生の意識

資料編 調査票見本、基礎集計表

第1節 大学生の学習状況

授業への出席状況

大学生の授業への出席率は平均して8.7割と高い。学年の上昇とともに出席率は下がり、理系や職業資格と直結した学部で出席率が高いのに対して「社会科学」では低く、また男子よりも女子のほうが高い傾向がみられた。

Q

あなたは授業に平均してどの程度出席していますか。

かつては「大学レジャーランド」といわれ、大学生は講義そっちのけで遊びやサークル、アルバイトに精を出していたとされるが、近年では、授業に出席する学生が増え、大学生が「まじめ化」してきたと指摘される。それでは、学生たちは実際にどの程度授業に出席しているのだろうか。

授業に平均して出席する割合をたずねた結果について、学年別に示したのが表3-1-1である。まず、全体の分布をみると、「10割」という回答が41.0%にもものぼる。ほぼ全出席にあたる9割以上の出席は69.7%、8割以上では84.0%を占め、平均して8.7割の出席となっている。これらの数値から、現在の大学生の授業への出席率の高さが裏づけられよう。

学年別では、「1年生」が最も出席率が高く、学年が上がるにつれて低下し、「4年生」が最も低い。大学生活への慣れから徐々に低下している面もあるだろうが、高学年、とりわけ「4年生」の出席率の平均が低い背景には就職活動の影響が考えられる。それでも、4年生になっても77.6%は8割以上出席しており、できるかぎり出席している様子がかがえる。

次に、表3-1-2で学部系統別の結果をみてみよう。「保健その他」の「10割」、すなわち全てに出席という回答が66.4%と全体に比べて25.4

ポイントも上回っている。その他、「理工」「農水産」「教育」など、理系や職業資格と直結した学部で「10割」とする回答が多い結果となった。これに対して、「社会科学」は「10割」の比率が全体に比べて10.2ポイント低く、平均値も低い。「社会科学」系の学部においては一般的に大人数講義が多く、出席をとらない傾向があるが、そうした事情も出席率の低さと関係しているかもしれない。

また、性別での出席率の平均をみると、「男子」が8.5割、「女子」が8.9割で、女子のほうが出席状況が良好である（巻末の基礎集計表を参照）。

なお、全般的に出席率が高いなかで、出席率6割以下の学生が全体で8.9%存在することも指摘しておきたい。こうした欠席しがちな学生は特に4年生に多く、就職活動の影響が考えられる。しかし、それ以外の学年の場合、他にやりたいことがあって自主的に授業を休んでいるのか、あるいは、経済的事情や健康上の理由（メンタルヘルスも含む）などから休まざるをえないのか、その理由までは本調査ではうかがい知ることができない。場合によっては、大学生活ないしは学習への不適応、さらには留年、休学、退学などにも発展しかねないことから、生活実態や学習状況など他のデータと結びつけて、これらの学生の特徴を明らかにする必要があるだろう。

表3-1-1 授業への出席状況（全体・学年別）

(%)

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
平均(単位:割)	8.7	9.1	8.8	8.7	8.2
10割	41.0	48.9	44.4	39.5	31.4
9割	28.7	30.7	29.4	25.9	29.0
8割	14.3	10.8	12.3	17.0	17.2
7割	7.1	5.1	5.4	9.1	8.6
6割	2.5	1.5	3.4	2.4	2.7
5割	2.5	1.5	2.3	3.0	3.0
4割	0.6	0.3	0.8	0.9	0.5
3割	1.1	0.4	1.0	1.2	1.9
2割	0.5	0.2	0.4	0.4	1.0
1割	0.6	0.3	0.3	0.4	1.4
0割	1.1	0.4	0.3	0.2	3.3

注1) ○は全体よりも5ポイント以上高いものを示す。

注2) ◓は全体よりも5ポイント以上低いものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

表3-1-2 授業への出席状況（全体・学部系統別）

(%)

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
平均(単位:割)	8.7	8.8	8.3	8.9	9.1	9.4	9.0	8.9
10割	41.0	38.7	30.8	49.8	45.6	66.4	49.0	43.0
9割	28.7	32.9	28.7	26.4	33.6	21.2	25.9	34.9
8割	14.3	15.2	17.1	12.0	12.0	6.4	14.7	13.4
7割	7.1	8.2	9.9	4.3	4.0	2.8	6.3	1.3
6割	2.5	1.6	3.7	1.7	3.2	1.8	1.4	2.0
5割	2.5	1.1	4.4	1.8	0.0	0.7	0.7	0.7
4割	0.6	0.6	0.8	0.5	0.8	0.0	0.0	0.7
3割	1.1	0.8	1.8	0.7	0.0	0.0	0.0	2.0
2割	0.5	0.4	0.8	0.3	0.0	0.0	1.4	0.0
1割	0.6	0.4	1.0	0.3	0.0	0.4	0.7	0.0
0割	1.1	0.2	1.0	2.0	0.8	0.4	0.0	2.0

注1) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注2) ◓は全体よりも5ポイント以上、◔は10ポイント以上低いものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

大学教育に対する選好

7割を超える大学生が基礎・基本が中心の授業を望み、約6割が幅広い領域にわたって自由に履修し、授業を通してやりたいことをみつけるのが望ましいと考えている。大学教育に対する考え方は、「教育」「保健その他」「人文科学」の学部系統で特徴的な傾向がみられ、学生が専攻する学問分野の特性とかがわっていると考えられる。

Q

大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。それぞれ近いものをお選びください。

大学生の大学教育に対する考え方を明らかにするために、2つの対立する選択肢のうちどちらかを選ぶ形式でたずねた結果が図3-1-1である。

授業の内容やカリキュラムの構成については、「A：教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい」(82.0%) > 「B：学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい」(18.0%)、「A：応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい」(72.9%) > 「B：基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい」(27.1%)という結果となった。7割以上の学生が自分で学び探究する機会よりも、講義形式で基礎からきちんと丁寧に教えてもらうことを重視している。また、「A：出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい」と考える学生が70.0%に達することは、先に示した大学生の授業への出席率が高い結果と符合する。こうした学生の意識からは、学術研究の場である大学が「学校化」していくことが期待されているようにうかがえる。

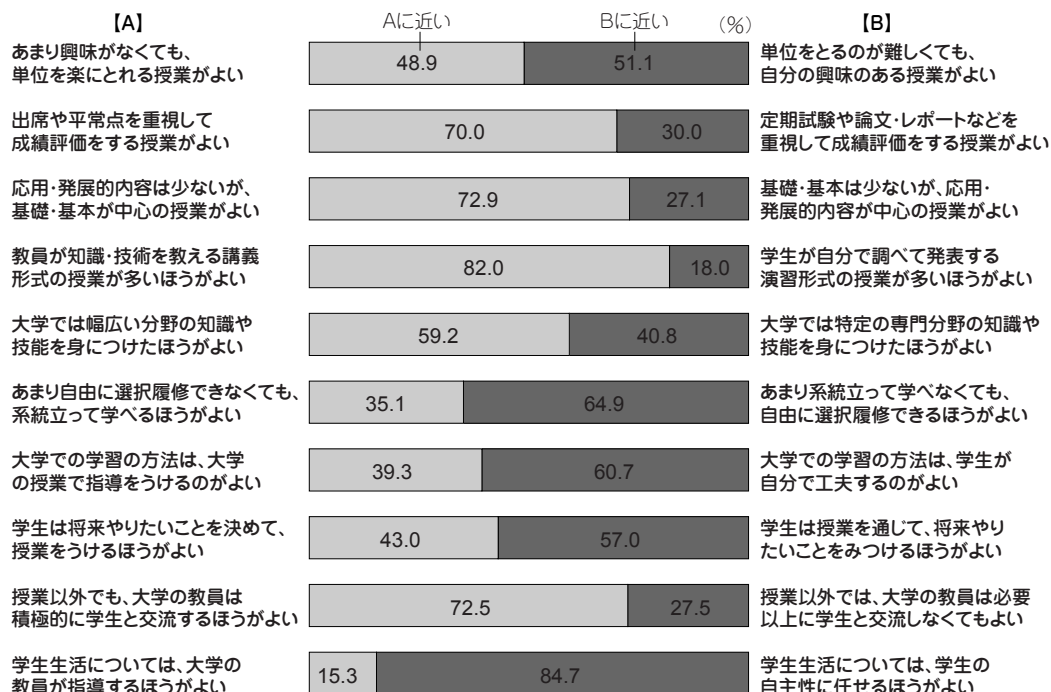
しかし、学生は基礎から教えてほしいと考えてはいながら、必ずしも系統立った積み上げ式のカリキュラムを求めているわけではない。「B：あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい」(64.9%) > 「A：あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい」(35.1%)、「A：大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい」(59.2%) > 「B：大学では特定の専門分野の知

識や技能を身につけたほうがよい」(40.8%)、「B：学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」(57.0%) > 「A：学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」(43.0%)といった結果をみると、約6割の学生は最初から専門分野を明確に決めたくて、それを順序立てて深く学んでいくよりも、幅広い領域にわたって自由に履修するなかで、将来やりたいことをみつけられるような柔軟なカリキュラムを望ましいと考えている。

他方、教員のかかわり方については、「A：授業以外にも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい」(72.5%) > 「B：授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい」(27.5%)と、教員からの働きかけや交流に肯定的である一方で、「B：学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい」(84.7%) > 「A：学生生活については、大学の教員が指導するほうがよい」(15.3%)というように、学生生活への必要以上の干渉に対しては否定的な見解を示している。

次に、学年別の結果を表3-1-3に示した。学年による大きな差はみられなかったが、学年の上昇とともに変化する項目が3つあった。学年が上がるにつれ、徐々に比率が増大していくのは、「B：定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい」(「1年生」25.1% < 「2年生」29.8% < 「3年生」31.1% < 「4年生」34.0%、以下同)、「B：学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよ

図3-1-1 大学教育に対する選好（全体）



注) サンプル数は4,070名。

表3-1-3 大学教育に対する選好（全体・学年別）

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
A:あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい	48.9	48.5	50.5	50.3	46.4
B:単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	51.1	51.5	49.5	49.7	53.6
A:出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい	70.0	74.9	70.2	68.9	66.0
B:定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	30.0	25.1	29.8	31.1	34.0
A:応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい	72.9	74.2	75.0	70.6	71.6
B:基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい	27.1	25.8	25.0	29.4	28.4
A:教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい	82.0	84.7	83.7	80.7	79.0
B:学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい	18.0	15.3	16.3	19.3	21.0
A:大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい	59.2	56.1	60.8	58.1	61.8
B:大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	40.8	43.9	39.2	41.9	38.2
A:あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい	35.1	33.8	37.5	35.5	33.6
B:あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい	64.9	66.2	62.5	64.5	66.4
A:大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい	39.3	43.0	40.8	38.6	34.7
B:大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	60.7	57.0	59.2	61.4	65.3
A:学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい	43.0	46.5	42.1	43.6	39.8
B:学生は授業を通して、将来やりたいことをみつけるほうがよい	57.0	53.5	57.9	56.4	60.2
A:授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい	72.5	72.4	72.3	74.0	71.2
B:授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい	27.5	27.6	27.7	26.0	28.8
A:学生生活については、大学の教員が指導するほうがよい	15.3	15.5	15.3	14.7	15.7
B:学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい	84.7	84.5	84.7	85.3	84.3

注) ()内はサンプル数。

い」(15.3% < 16.3% < 19.3% < 21.0%)、「B：大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい」(57.0% < 59.2% < 61.4% < 65.3%)であった。決して大勢ではないが、高学年になるほど、ただ授業に出席して一方的に教わるだけにとどまらず、自律的に学習することの意義や必要性について理解が深まっていく様子がみとれる。

つづいて表3-1-4に示したのが、学部系統別の結果である。全体と比べて5ポイント以上高かった項目数は、「教育」(5項目)、「保健その他」(3項目)、「人文科学」(2項目)、「理工」(1項目)、「農水産」(1項目)で、「教育」「保健その他」「人文科学」においてとりわけ特徴的な傾向がみられた。

「教育」では、「B：単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい」(「教育」62.2% > 「全体」51.1%、11.1ポイント差、以下同)、「A：出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい」(75.5% > 70.0%、5.5ポイント差)、「B：学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい」(25.2% > 18.0%、7.2ポイント差)、「B：大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい」(67.8% > 60.7%、7.1ポイント差)、「A：学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」(49.0% > 43.0%、6.0ポイント差)と、全体に比べていくぶん意欲的・積極的な学習姿勢が見受けられる。

「保健その他」では、「B：大学では特定の専

門分野の知識や技能を身につけたほうがよい」(「保健その他」49.5% > 「全体」40.8%、8.7ポイント差、以下同)、「A：あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい」(58.7% > 35.1%、23.6ポイント差)、「A：学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」(65.7% > 43.0%、22.7ポイント差)と、他の学部系統とは際立った差がみられる。「保健その他」に含まれる学部は卒業後の進路や職業がはっきりしており、身につけるべき知識や技能も明確で、必修科目なども多い。このようなことから学生の目的意識も明確で、専門性の向上を重視する傾向にあることが推察される。これに類する傾向は、「理工」「農水産」などの理系の学部にもややみられる。

これとは対照的に、「人文科学」では、「B：あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい」(「人文科学」76.3% > 「全体」64.9%、11.4ポイント差、以下同)、「B：学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい」(66.2% > 57.0%、9.2ポイント差)となった。職業との直接的な結びつきの弱い「人文科学」系の学部では、どちらかという幅広い教養教育的な役割が大学に期待され、大学が進路選択の猶予期間として位置づけられる傾向にある。

以上のように、大学生の大学教育に対する考え方は、専攻する学問分野の特性ならびにカリキュラム構造と少なからず関係していると考えられる。

表3-1-4 大学教育に対する選好（全体・学部系統別）

（%）

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)
A:あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい	48.9	44.1	53.6	50.9	44.8	44.9	<u>37.8</u>
B:単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	51.1	55.9	46.4	49.1	55.2	55.1	62.2
A:出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい	70.0	71.7	66.7	72.6	72.8	68.9	<u>75.5</u>
B:定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	30.0	28.3	33.3	27.4	27.2	31.1	<u>24.5</u>
A:応用・発展の内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい	72.9	69.4	73.4	74.9	68.8	72.8	75.5
B:基礎・基本は少ないが、応用・発展の内容が中心の授業がよい	27.1	30.6	26.6	25.1	31.2	27.2	24.5
A:教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい	82.0	81.6	82.8	82.4	82.4	83.7	<u>74.8</u>
B:学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい	18.0	18.4	17.2	17.6	17.6	16.3	<u>25.2</u>
A:大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい	59.2	63.8	62.1	54.3	<u>51.2</u>	<u>50.5</u>	62.2
B:大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	40.8	36.2	37.9	45.7	48.8	49.5	37.8
A:あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい	35.1	<u>23.7</u>	31.6	<u>43.1</u>	37.6	58.7	32.2
B:あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい	64.9	76.3	68.4	<u>56.9</u>	62.4	<u>41.3</u>	67.8
A:大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい	39.3	35.1	39.3	43.4	36.8	40.6	<u>32.2</u>
B:大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	60.7	64.9	60.7	56.6	63.2	59.4	67.8
A:学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい	43.0	<u>33.8</u>	43.9	43.1	39.2	65.7	49.0
B:学生は授業を通して、将来やりたいことをみつけるほうがよい	57.0	66.2	56.1	56.9	60.8	<u>34.3</u>	<u>51.0</u>
A:授業以外にも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい	72.5	73.7	70.1	73.9	74.4	72.1	75.5
B:授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい	27.5	26.3	29.9	26.1	25.6	27.9	24.5
A:学生生活については、大学の教員が指導するほうがよい	15.3	13.1	16.8	16.8	12.8	13.8	11.9
B:学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい	84.7	86.9	83.2	83.2	87.2	86.2	88.1

注1) 学部系統別の「その他」は省略した。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) —は全体よりも5ポイント以上、—は10ポイント以上低いものを示す。

注4) ()内はサンプル数。

大学での授業への取り組み

7割以上の大学生が授業に臨むにあたり基本的な学習姿勢を身につけているが、授業外では自主的に勉強する学生とそうでない学生とに二分している。授業の予習・復習をする学生は約3分の1である。こうした授業への取り組みについては、性別、学年別、学部系統別によっていくつか特徴がみられ、なかでも学部系統別の違いが顕著であった。



あなたは大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

大学でのふだんの授業への取り組み、すなわち、学生の学習に対する姿勢や態度、日頃の学習行動について、26項目にわたってたずねた結果を図3-1-2に示した。

「授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する」に「あてはまる」と回答した比率は91.1%（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同）で最も多い。以下、「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」（72.9%）までの上位9項目には、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」（87.4%）、「履修登録した科目は途中で投げ出さない」（81.2%）、「できるかぎり良い成績をとろうとする」（73.4%）など、授業に臨むうえで基本的な学習の姿勢にかかわることがらが挙がっている。これらは7割以上の学生にあてはまる。

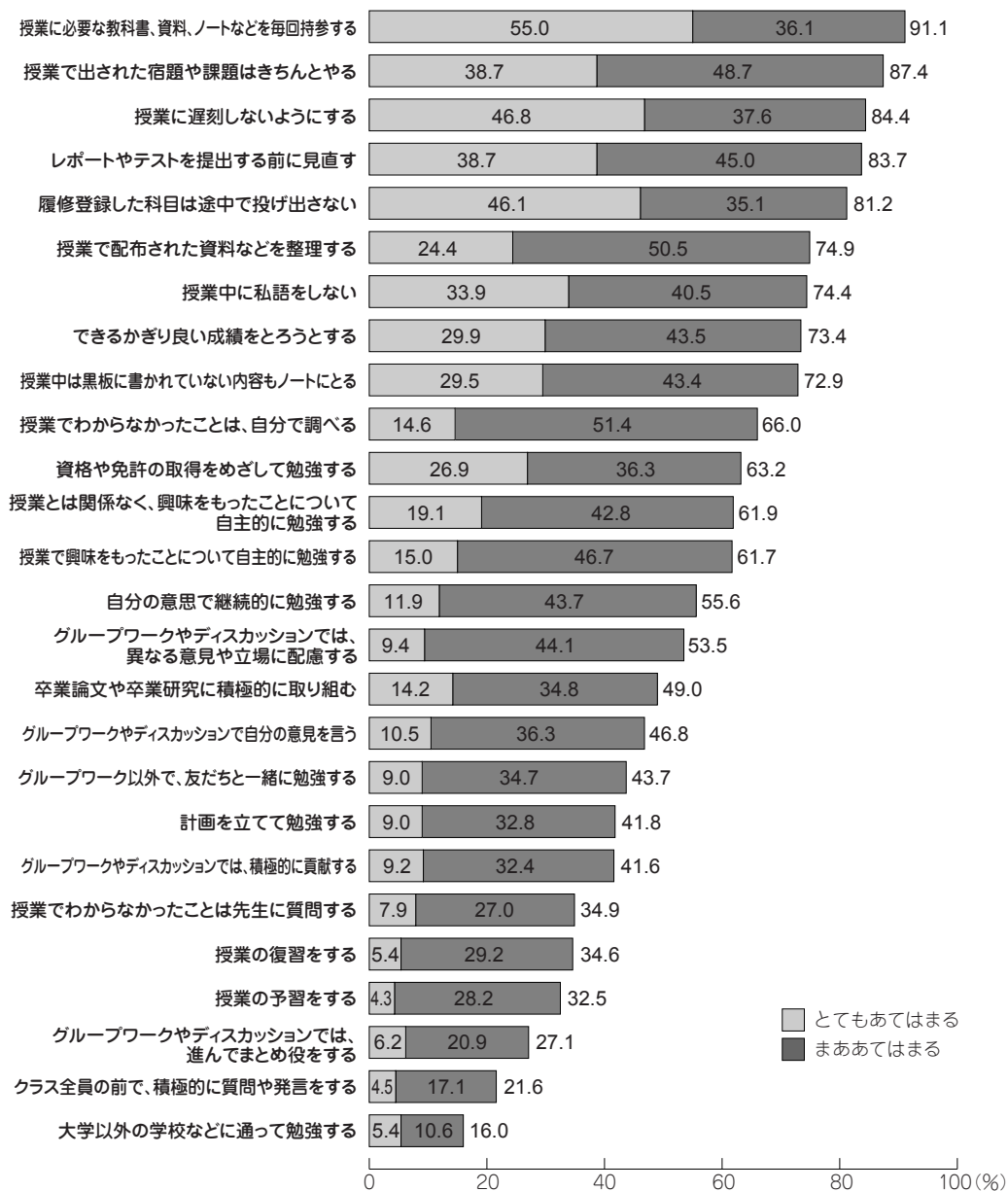
次に多いのは、「授業でわからなかったことは、自分で調べる」（66.0%）、「授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する」（61.9%）、「自分の意思で継続的に勉強する」（55.6%）などの5項目である。これらは授業外の時間にわたって自主的に勉強することを示す項目で、6割前後が「あてはまる」と回答している。ただし、「まああてはまる」の比率が上位9項目とあまり変わらないのに対して、「とてもあてはまる」と回答した比率は上位9項目のおよそ2分の1程度にとどまっている（上位9項目において「とてもあてはまる」と回答した比率の平均が38.1%、次の5項目の平均が17.5%）。つまり、積極的に自主的な勉強を進めている学

生は2割弱ということになる。また、これら5項目について、「あてはまらない」（「あまりあてはまらない」+「全くあてはまらない」）を選択した学生は4割前後にのぼる計算になる。このように、全体としては、授業外において自主的に勉強する学生とそうでない学生とに二分する傾向にあった。

その次に続くのは、グループワークやディスカッションに関する項目が多い。関連する項目をみると、「グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する」（53.5%）>「グループワークやディスカッションで自分の意見を言う」（46.8%）>「グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する」（41.6%）>「グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする」（27.1%）という順で比率が低くなっている。自分から発信して議論の中心に立ったり、リーダーシップを発揮してまとめ役になったり、より積極的にかかわる行為ほど比率は少なくなっている。こうした傾向は、「クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする」が21.6%と低い値を示している点にも表れている。

なお、「授業の復習をする」と回答した学生は34.6%、「授業の予習をする」と回答した学生は32.5%であった。いずれも3分の1程度であり、設問全体のなかでは比率が低い部類に含まれる。近年、単位制度を実質化させるために授業外学習を学生に求める必要性が指摘されているが、教員の側も学生に予習・復習を促すような授業設計を工夫することが重要であろう。

図3-1-2 授業への取り組み（全体）



注) サンプル数は4,070名。

次に、授業への取り組みの結果を性別によって示したものが表3-1-5となる。「とともあてはまる」+「まああてはまる」の比率は、26項目中18項目において、女子が男子を上回っていた。しかも、5ポイント以上の差をつけた項目はいずれも女子の比率が高かったのに対して、男子のほうが上回った項目の場合は僅差であった。

10ポイント以上差が開いた項目は、「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」（「女子」83.0%＞「男子」66.2%、16.8ポイント差、以下同）、「資格や免許の取得をめざして勉強する」（69.8%＞58.8%、11.0ポイント差）の2項目である。5ポイント以上の差がみられたのは6項目あり、主なものを挙げれば、「授業で配布

表3-1-5 授業への取り組み（全体・性別）

(%)

	全体 (4,070)	男子 (2,439)	女子 (1,631)
授業の予習をする	32.5	31.8	33.8
授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	91.1	89.5	93.6
授業に遅刻しないようにする	84.4	83.6	85.7
履修登録した科目は途中で投げ出さない	81.2	78.4	< 85.3
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	72.9	66.2	≪ 83.0
授業中に私語をしない	74.4	74.7	73.9
授業でわからなかったことは先生に質問する	34.9	34.4	35.6
授業で出された宿題や課題はきちんとやる	87.4	84.8	< 91.3
レポートやテストを提出する前に見直す	83.7	82.3	85.7
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	21.6	21.9	21.1
グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	46.8	46.0	48.0
グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	41.6	40.4	43.4
グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	27.1	28.0	26.0
グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	53.5	51.7	56.3
授業の復習をする	34.6	35.5	33.4
授業でわからなかったことは、自分で調べる	66.0	66.5	65.2
授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	61.7	61.9	61.4
授業で配布された資料などを整理する	74.9	71.6	< 79.9
授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	61.9	61.8	62.1
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	43.7	41.4	< 47.2
資格や免許の取得をめざして勉強する	63.2	58.8	≪ 69.8
大学以外の学校などに通って勉強する	16.0	17.1	14.2
計画を立てて勉強する	41.8	41.5	42.4
自分の意思で継続的に勉強する	55.6	55.6	55.6
できるかぎり良い成績をとろうとする	73.4	70.2	< 78.0
卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	49.0	46.9	< 52.3

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) <>は5ポイント以上、≪≫は10ポイント以上の差があるものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

された資料などを整理する」(79.9%>71.6%、8.3ポイント差)、「履修登録した科目は途中で投げ出さない」(85.3%>78.4%、6.9ポイント差)、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」(91.3%>84.8%、6.5ポイント差)などであった。こうした結果から、女子学生のほうが男子学生よりも、授業内・授業外にかかわらず、全般的に勉強にまじめに取り組んでいる様子が明らかである。

つづいて、表3-1-6に学年別の結果を示した。学年の上昇にともなって、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の比率が増大する

項目と減少する項目がみられる。その特徴は3点にまとめられる。

第1に、学年が上がるにつれて、学生はより積極的にグループワークやディスカッションに参加するようになる。「グループワークやディスカッションで自分の意見を言う」(「1年生」42.0%<「2年生」42.4%<「3年生」49.4%<「4年生」53.4%、以下同)、「グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する」(35.3%<38.6%<44.3%<48.4%)、「グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する」(46.2%<52.4%<55.2%<

表3-1-6 授業への取り組み（全体・学年別）

（%）

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
授業の予習をする	32.5	43.1	34.6	28.3	24.3
授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	91.1	92.8	92.1	91.3	88.4
授業に遅刻しないようにする	84.4	87.3	85.6	81.8	82.9
履修登録した科目は途中で投げ出さない	81.2	86.1	83.4	79.2	76.0
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	72.9	69.2	72.8	74.3	75.2
授業中に私語をしない	74.4	71.7	74.1	75.1	76.6
授業でわからなかったことは先生に質問する	34.9	33.5	34.2	35.1	36.8
授業で出された宿題や課題はきちんとやる	87.4	88.3	88.4	87.5	85.4
レポートやテストを提出する前に見直す	83.7	81.9	83.8	84.5	84.4
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	21.6	20.3	20.8	22.6	22.5
グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	46.8	42.0	42.4	49.4	53.4
グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	41.6	35.3	38.6	44.3	48.4
グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	27.1	25.9	24.4	27.7	30.6
グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	53.5	46.2	52.4	55.2	60.2
授業の復習をする	34.6	40.1	37.7	31.6	29.0
授業でわからなかったことは、自分で調べる	66.0	65.8	65.8	64.9	67.1
授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	61.7	60.5	59.4	64.0	62.8
授業で配布された資料などを整理する	74.9	73.8	76.6	76.6	72.9
授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	61.9	57.8	61.5	63.5	64.9
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	43.7	45.9	43.6	42.4	43.0
資格や免許の取得をめざして勉強する	63.2	60.2	61.9	64.0	66.7
大学以外の学校などに通って勉強する	16.0	13.3	13.7	16.3	20.5
計画を立てて勉強する	41.8	35.4	40.3	43.9	47.6
自分の意思で継続的に勉強する	55.6	52.9	52.1	57.3	59.9
できるかぎり良い成績をとろうとする	73.4	75.8	74.1	72.0	71.4
卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	49.0	36.1	39.7	56.3	63.9

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

注4) ()内はサンプル数。

60.2%) がこれに該当する。

第2に、学年が上がるにつれて、自主的に学習する傾向が強まっている。これには将来目指す進路に向けての準備も含まれるだろうが、授業とは直接かかわりのない学習に取り組んでいることもみてとれる。主だった項目を挙げると、「授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する」(57.8%<61.5%<63.5%<64.9%)、「資格や免許の取得をめざして勉強する」(60.2%<61.9%<64.0%<66.7%)、「計画を立てて勉強する」(35.4%<40.3%<43.9%<

47.6%)、「卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む」(36.1%<39.7%<56.3%<63.9%)などがある。とりわけ、卒業論文等については、1、2年生と3、4年生との開きが大きい。

第3に、上記の2点とは反対に、学年の上昇とともに比率が低下する項目がみられた。たとえば、「授業の予習をする」(43.1%>34.6%>28.3%>24.3%)、「履修登録した科目は途中で投げ出さない」(86.1%>83.4%>79.2%>76.0%)、「授業の復習をする」(40.1%>37.7%>31.6%>29.0%)などである。これらを見るか

表3-1-7 授業への取り組み（全体・学部系統別）

(%)

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
授業の予習をする	32.5	43.5	30.8	30.5	24.8	26.5	23.1	30.2
授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	91.1	93.8	89.5	90.2	90.4	91.9	96.5	92.6
授業に遅刻しないようにする	84.4	86.8	82.0	85.0	84.0	86.9	84.7	87.2
履修登録した科目は途中で投げ出さない	81.2	81.4	79.3	79.9	81.6	89.8	83.9	88.6
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	72.9	80.5	72.2	62.0	73.6	84.1	79.8	81.2
授業中に私語をしない	74.4	77.6	73.7	72.3	75.2	73.8	75.6	75.2
授業でわからなかったことは先生に質問する	34.9	37.9	30.4	37.8	40.0	38.5	32.2	38.3
授業で出された宿題や課題はきちんとやる	87.4	89.5	84.6	88.5	86.4	90.1	91.6	89.3
レポートやテストを提出する前に見直す	83.7	85.8	82.5	82.2	82.4	88.3	83.3	85.3
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	21.6	25.8	22.7	16.4	16.0	16.6	29.4	26.8
グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	46.8	49.2	47.9	40.3	44.0	49.4	58.8	50.3
グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	41.6	43.0	41.5	36.8	42.4	46.6	52.5	47.6
グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	27.1	27.4	27.7	25.8	22.4	25.5	34.3	29.5
グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	53.5	56.8	53.8	46.2	56.0	59.8	66.4	54.4
授業の復習をする	34.6	33.9	29.5	40.8	32.0	48.4	26.6	34.9
授業でわからなかったことは、自分で調べる	66.0	67.1	61.5	69.3	78.4	72.4	60.1	66.4
授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	61.7	67.5	60.4	59.3	59.2	57.6	63.0	67.1
授業で配布された資料などを整理する	74.9	78.5	72.2	74.7	75.2	82.4	69.9	75.9
授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	61.9	66.9	61.9	59.9	58.4	51.3	65.1	68.4
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	43.7	42.9	39.4	45.9	45.6	55.5	54.6	43.7
資格や免許の取得をめざして勉強する	63.2	66.5	64.5	52.0	59.2	79.5	75.6	65.7
大学以外の学校などに通って勉強する	16.0	15.1	20.9	11.5	12.0	10.6	12.6	16.1
計画を立てて勉強する	41.8	39.8	44.0	37.3	41.6	51.9	42.7	40.3
自分の意思で継続的に勉強する	55.6	55.9	57.2	50.7	52.8	60.1	58.8	59.0
できるかぎり良い成績をとろうとする	73.4	74.0	72.8	72.9	68.8	74.2	77.7	76.5
卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	49.0	53.7	44.0	53.3	55.2	37.5	54.6	58.4

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。
 注3) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。
 注4) ()内はサンプル数。

ぎり、学年が上がるほど正課の授業に対する努力や根気が徐々に薄れていっているようである。これは第2の点、すなわち授業以外の学習に力を注ぐようになることと対照的ともいえる。

最後に、学部系統別の結果を示しておく(表3-1-7)。学生の授業への取り組みは、性別や学年よりも学部系統による違いのほうがより明瞭に出ている。全体と比べて5ポイント以上差のついた項目を挙げて、それぞれの特徴をまとめておきたい。

「人文科学」では、全体より10ポイント以上

上回ったのが、「授業の予習をする」(43.5%)の1項目であった。5ポイント以上高かったのは、「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」(80.5%)、「授業で興味をもったことについて自主的に勉強する」(67.5%)、「授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する」(66.9%)の3項目である。人文科学では外国語の授業などが多いことから予習の比率が高いのであろうが、授業にもまじめに取り組む、自主的に勉強する傾向がうかがえる。

「社会科学」では、全体よりも5ポイント以

上低いのが2項目のみで、それほどはっきりした特徴はみられなかった。「授業の復習をする」(29.5%)、「卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む」(44.0%)がこれに該当し、人文科学に比べれば、正課の授業に対してやや積極性に欠けるといえるかもしれない。ただし、こうした数値はそもそも社会科学でどの程度卒業論文を課しているかということにも留意して解釈する必要があるだろう。

「理工」は、全体より5ポイント以上上回った項目は「授業の復習をする」(40.8%)のみであった。一方、10ポイント以上下回ったのは2項目、5ポイント以上は3項目である。「クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする」(16.4%)、「グループワークやディスカッションで自分の意見を言う」(40.3%)、「グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する」(46.2%)などが全体より5ポイント以上低い点を見ると、ディスカッションなどに対してやや消極的とみなすこともできるが、これには理工系でディスカッションを取り入れた授業を経験した比率が低いことも影響していると考えられる*1。

「農水産」では、全体よりも10ポイント以上高かった項目が1つ、5ポイント以上上回った項目が2つ、5ポイント以上下回った項目は2つであった。「クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする」(16.0%)は低かったものの、「授業でわからなかったことは、自分で調べる」(78.4%)、「授業でわからなかったことは先生に質問する」(40.0%)など、授業の理解に努めるような項目は全体を上回っていた。

これらに対して、特徴がより明確に表れていたのは、「保健その他」と「教育」である。いずれの学部系統も全体と比べて比率に差の開いた項目が多数みられた。

「保健その他」は、全体よりも10ポイント以上高かった項目が5つ、5ポイント以上高かった項目が5つ、10ポイント以上低かった項目は2つ、5ポイント以上低かった項目は3つで、計

15項目であった。特に全体よりも高い値を示したのは、「資格や免許の取得をめざして勉強する」(79.5%)、「授業の復習をする」(48.4%)、「グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する」(55.5%)、「授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる」(84.1%)、「計画を立てて勉強する」(51.9%)である。逆に、全体よりも特に低かったのは、「卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む」(37.5%)、「授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する」(51.3%)であった。「保健その他」の学生は、授業を中心として、勉強に熱心に取り組んでいるが、その反面、授業以外のことや資格・免許の取得に結びつかないことにはあまり手が回らない状況がうかがえる。

「教育」も、全体よりも10ポイント以上高かった項目が5つ、5ポイント以上高かった項目が5つ、5ポイント以上低かった項目は4つで、計14項目と多かった。「保健その他」と同様、「資格や免許の取得をめざして勉強する」(75.6%)、「グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する」(54.6%)が全体よりも10ポイント以上高い値となっている。特徴的な点は、グループワークやディスカッションに関する項目において、「異なる意見や立場に配慮する」(66.4%)、「自分の意見を言う」(58.8%)、「積極的に貢献する」(52.5%)、「進んでまとめ役をする」(34.3%)などのすべてで全体よりも5ポイント以上高い値を示し、積極的に発言し活動する傾向がみられることである。これは「クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする」(29.4%)の比率が高いことにも表れている。他方、全体に比べて5ポイント以上低かった項目は、「授業の予習をする」(23.1%)、「授業の復習をする」(26.6%)、「授業でわからなかったことは、自分で調べる」(60.1%)、「授業で配布された資料などを整理する」(69.9%)である。これらがいずれも全学部系統の中で最も低い値となっている点にも注意したい。

*1 第3章第1節「授業の経験」(p.97、表3-1-11)を参照。

定期試験・レポートの準備期間

学期末の定期試験とレポートの準備期間については、性別や学年によってはほとんど違いがみられず、およそ半数の大学生が1～2週間前に準備を始めている。学部系統別で見ると、「保健その他」では定期試験の準備に早くとりかかる学生が多く、「教育」はその逆の傾向にあった。



あなたは試験やレポートのために、おおよそいつごろから準備を始めることが多いですか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

大学生の日頃の学習態度や学習状況についてこれまで明らかにしてきたが、それでは学期末の定期試験やレポートの準備は実際にいつ頃から始めているのであろうか。

図3-1-3は定期試験、図3-1-4はレポートについて、試験実施日／提出締め切り日のどの程度前から準備を始めているかをたずねた結果である。回答比率の高い順に並べた2つの図をみると、定期試験もレポートも6位と8位の回答が入れ替わっているだけで、それ以外は同じ回答順位であった。定期試験では6位に「前日」、8位に「5日前」となっているが、執筆に時間のかかるレポートではそれが逆転している。また、こうした順位だけでなく、回答比率の分布が定期試験とレポートで類似しており、準備期間にほとんど差はないことがわかる。「1週間前」が最も多く（定期試験24.6%、レポート26.2%、以下同）、次に「2週間前」（18.8%、18.2%）が多い。これらに「10日前」を含めると、約半数（53.9%、55.0%）が1～2週間前に準備を始めていることがわかる。また、3週間以上前（「1カ月以上前」を含む）から準備を始める学生が定期試験では16.7%、レポートでは14.0%いる一方で、「前日」から「当日」にかけて間に準備する学生も、それぞれ9.2%、5.3%いる。

定期試験・レポートの準備については、性別や学年によって特に違いはなかったが、学部系

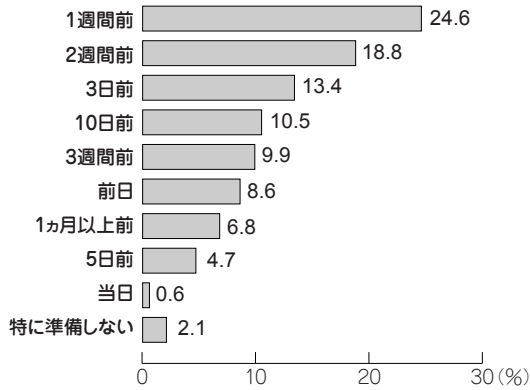
統別では、「保健その他」と「教育」、また「農水産」において特徴がみられた。

表3-1-8によれば、「保健その他」では、定期試験の準備に関して、「1ヵ月以上前」（「保健その他」13.8%＞「全体」6.8%、7.0ポイント差、以下同）、「3週間前」（17.3%＞9.9%、7.4ポイント差）、「2週間前」（24.7%＞18.8%、5.9ポイント差）が全体に比べて高く、「3日前」（4.6%＜13.4%、8.8ポイント差）が低くなっている。ここから明らかのように、「保健その他」では早くから定期試験の準備を始める学生が多い傾向にある。保健衛生、医学、歯学、薬学を含むこの種の学部系統では、ふだんの授業の取り組み*1、そして試験の準備期間をみても、他の学部比べてかなり勉強が厳しい様子が見えがえる。

これに対して、「教育」の定期試験の準備に関しては、「2週間前」（「教育」13.3%＜「全体」18.8%、5.5ポイント差、以下同）の回答比率が低く、「1週間前」（31.5%＞24.6%、6.9ポイント差）や「3日前」（20.3%＞13.4%、6.9ポイント差）が高い値を示した（表3-1-8）。他の学部と比べると、試験の準備にとりかかるのが遅い学生がやや多いといえる。また、表3-1-8、表3-1-9によると、「農水産」も、定期試験・レポートともに「3日前」の回答が全体よりも高かった（定期試験5.8ポイント差、レポート8.9ポイント差）。

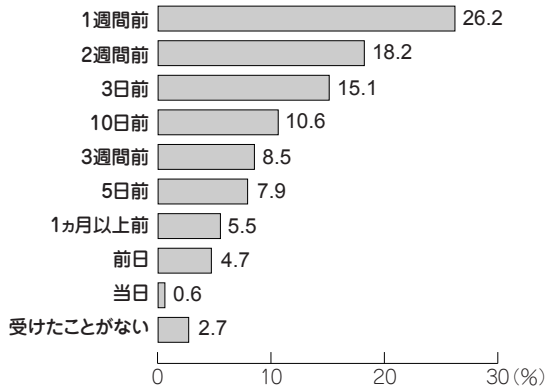
*1 第3章第1節「大学での授業への取り組み」（p.90、表3-1-7）を参照。

図3-1-3 学期末に受ける定期試験の準備：試験実施日の（全体）



注) サンプル数は4,070名。

図3-1-4 学期末に課されるレポートの準備：提出締め切り日の（全体）



注) サンプル数は4,070名。

表3-1-8 学期末に受ける定期試験の準備：試験実施日の（全体・学部系統別） (%)

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
1ヵ月以上前	6.8	4.4	8.0	6.0	4.8	13.8	2.8	6.0
3週間前	9.9	8.8	10.3	8.8	9.6	17.3	7.0	8.1
2週間前	18.8	17.8	17.6	21.4	16.8	24.7	13.3	16.8
10日前	10.5	10.8	11.1	10.2	10.4	9.5	7.0	10.1
1週間前	24.6	25.9	22.7	26.3	26.4	20.5	31.5	24.2
5日前	4.7	5.4	5.0	4.2	2.4	2.1	7.7	5.4
3日前	13.4	14.8	13.0	13.4	19.2	4.6	20.3	14.8
前日	8.6	9.3	9.1	7.3	8.8	6.0	7.0	12.8
当日	0.6	0.5	0.7	0.5	0.8	0.0	0.7	0.7
特に準備しない	2.1	2.3	2.4	1.8	0.8	1.4	2.8	1.3

注1) ○は全体よりも5ポイント以上高いものを示す。

注2) □は全体よりも5ポイント以上低いものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

表3-1-9 学期末に課されるレポートの準備：提出締め切り日の（全体・学部系統別） (%)

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
1ヵ月以上前	5.5	7.8	6.5	3.1	2.4	2.8	5.6	4.7
3週間前	8.5	12.1	9.8	4.7	3.2	5.3	9.8	8.7
2週間前	18.2	20.0	19.4	16.0	18.4	16.6	11.9	18.1
10日前	10.6	11.1	11.7	8.5	12.0	10.2	11.2	10.1
1週間前	26.2	24.1	24.9	28.6	24.0	31.1	28.7	26.2
5日前	7.9	6.6	7.9	8.5	8.8	8.8	9.8	7.4
3日前	15.1	13.6	12.4	19.5	24.0	13.4	16.8	17.4
前日	4.7	3.0	4.4	6.3	4.8	4.9	5.6	5.4
当日	0.6	0.6	0.4	0.8	0.0	0.7	0.7	1.3
受けたことがない	2.7	1.2	2.5	4.1	2.4	6.0	0.0	0.7

注1) ○は全体よりも5ポイント以上高いものを示す。

注2) □は全体よりも5ポイント以上低いものを示す。

注3) ()内はサンプル数。

授業の経験

これまでの授業の経験をたずねたところ、毎回コメントを課す授業や少人数の演習形式の授業が6割を超え、グループワークやディスカッション、教員と学生とのコミュニケーションの機会などを取り入れた授業はおよそ半数にのぼった。少なからず、学生の主体的な参加を促す双方向型授業が工夫されていることが明らかになった。



あなたはこれまで大学で、次のような授業を経験しましたか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

図3-1-5は、大学生がこれまで経験した授業についてたずねた結果である。ここでは授業の内容だけでなく、授業形態や授業方法も含めて詳細にたずねている。

まず、「学期末以外にもレポートが課される授業」が82.7%（「よくあった」＋「ある程度あった」の%、以下同）で最も多く、「学期末以外にもテストが課される授業」（78.2%）もほぼ同様の8割程度で、「毎回、授業内容に関するコメントや意見を書く授業」（68.6%）は7割近い値を示した。かつてのような定期試験や学期末レポートの発勝負型ではなく、成績評価の対象となる複数の課題を用意した授業が多いことが明らかである。また、約7割の学生が経験している「授業内容に関するコメント」は、出席の確認や平常点に利用できるだけではない。学生からの質問への応答など、教員と学生とのコミュニケーションを図り、授業理解を深めて知的動機づけを高めるうえでも有用といえる。

「少人数のゼミ・演習形式の授業」の経験は62.9%であり、このうち「よくあった」という回答は21.6%であった。図には示していないが、この項目で「ほとんどなかった」と答えた比率が18.4%であるところを見ると、8割以上の学生がなんらかの形で少人数授業を経験していると考えてよいだろう（巻末の基礎集計表を参照）。

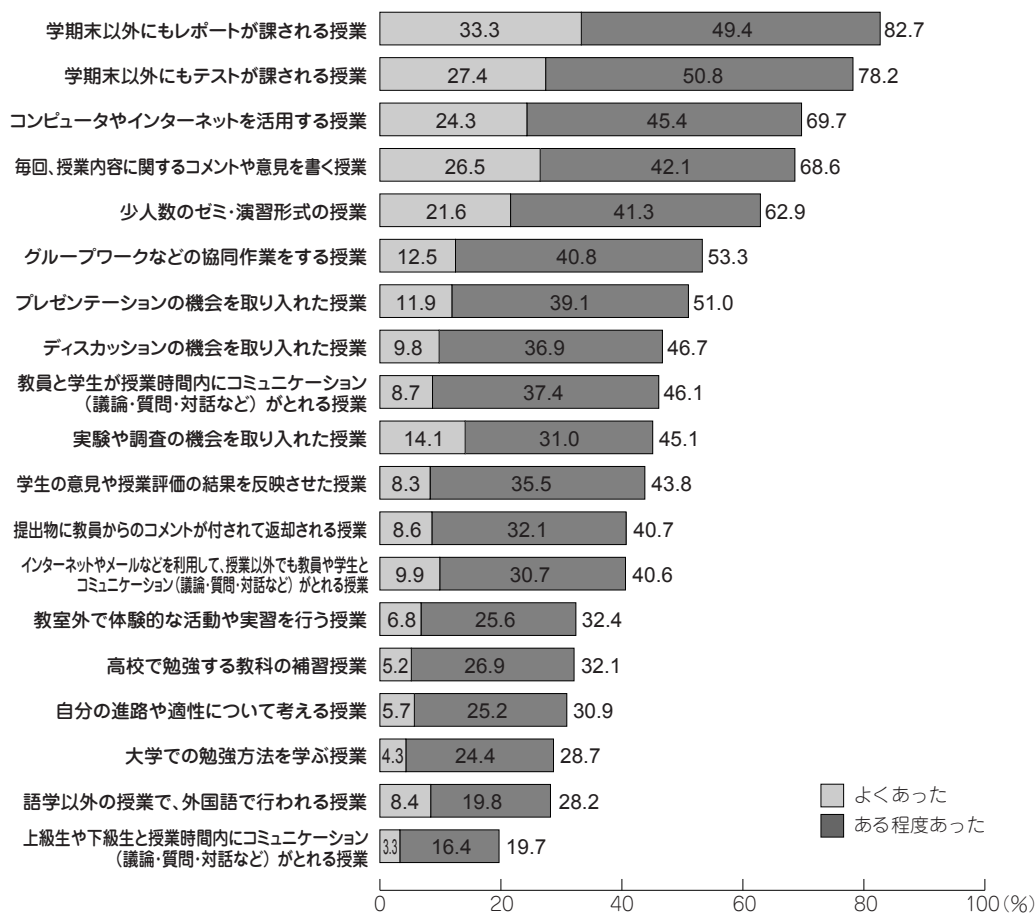
図3-1-5からは、こうした少人数授業のなかで実践しやすいアクティブ・ラーニング（能動的学習）を取り入れた授業が工夫されていることも確認できる。「グループワークなどの協同

作業をする授業」（53.3%）、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」（51.0%）、「ディスカッションの機会を取り入れた授業」（46.7%）、「実験や調査の機会を取り入れた授業」（45.1%）など、約半数の学生が少なからずグループワークやディスカッションを経験している。さらに、「教員と学生が授業時間内にコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業」（46.1%）、「学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業」（43.8%）、「提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業」（40.7%）、「インターネットやメールなどを利用して、授業以外でも教員や学生とコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業」（40.6%）といったように、4割以上の学生がこうした双方向的な授業がある程度以上あったと回答している。このように、授業中、また授業外でも、学生とコミュニケーションを図るように努め、学生の意見を授業に活かそうとしている大学教員が少なくないことが理解できる。

なお、大学生の学力・学習意欲・目的意識の多様化にともなって近年導入されるようになってきた「高校で勉強する教科の補習授業」（32.1%）、「自分の進路や適性について考える授業」（30.9%）、「大学での勉強方法を学ぶ授業」（28.7%）などは、本調査ではいずれも3割程度の回答にとどまった。

次に、表3-1-10に学年別にみた授業の経験を示した。1年生から4年生にかけて比率が順次増大していく項目は、19項目中7つであっ

図3-1-5 授業の経験（全体）



注) サンプル数は4,070名。

た。また、学年とともに順次増大はしないものの、1年生の値が最も低く、4年生で最も高くなる項目は3つあった。およそ半数の項目が学年の上昇とともに経験率が増大していることである。当然のことながら、学年が上がるにつれて経験する授業数は増えていく。また、カリキュラムの順序性も関係して、履修する授業に違いも生じてくる。調査の結果、1年生と4年生で最も大きな差がついたのは、「少人数のゼミ・演習形式の授業」（「1年生」51.5%＜「2年生」57.5%＜「3年生」68.6%＜「4年生」74.0%、以下同）であり、次に「実験や調査の機会を取り入れた授業」（35.3%＜45.6%＜49.2%＜50.1%）であった。一般的に高学年から本格的な専門のゼミや卒論指導などが始まることを考えると、この結果にはうなずけるであろう。

さらに、少人数授業の機会が増えていくにしたがって、アクティブ・ラーニング（能動的学習）を用いた授業経験の比率も上がっていくことが考えられる。「ディスカッションの機会を取り入れた授業」（43.0%＜46.5%＜47.8%＜49.1%）、「教員と学生が授業時間内にコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業」（42.8%＜43.2%＜48.0%＜50.6%）など、差は小さいが学年とともに比率は順次上がっている。それ以外にも、学年とともに順次増大してはいないが、1年生と4年生で差が大きいものとして、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」（「1年生」45.2%＜「4年生」54.2%、9.0ポイント差、以下同）、「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」（27.1%＜36.4%、9.3ポイント差）が挙げられる。

表3-1-10 授業の経験 (全体・学年別)

(%)

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
高校で勉強する教科の補習授業	32.1	36.1	34.3	30.5	27.5
大学での勉強方法を学ぶ授業	28.7	36.2	32.1	23.8	22.5
少人数のゼミ・演習形式の授業	62.9	51.5	57.5	68.6	74.0
実験や調査の機会を取り入れた授業	45.1	35.3	45.6	49.2	50.1
教室外で体験的な活動や実習を行う授業	32.4	27.1	33.8	32.0	36.4
毎回、授業内容に関するコメントや意見を書く授業	68.6	62.2	69.5	69.9	72.7
教員と学生が授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業	46.1	42.8	43.2	48.0	50.6
上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業	19.7	18.2	19.4	19.6	21.6
インターネットやメールなどを利用して、授業以外でも教員や学生とコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業	40.6	41.5	41.2	38.8	41.1
学期末以外にもテストが課される授業	78.2	77.5	78.7	77.9	78.5
学期末以外にもレポートが課される授業	82.7	78.1	83.2	85.2	84.1
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	40.7	40.7	42.5	40.5	39.3
学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業	43.8	40.5	43.7	44.0	46.7
グループワークなどの協同作業をする授業	53.3	49.6	55.0	54.4	54.4
ディスカッションの機会を取り入れた授業	46.7	43.0	46.5	47.8	49.1
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	51.0	45.2	52.8	51.7	54.2
コンピュータやインターネットを活用する授業	69.7	70.4	70.9	69.0	68.1
自分の進路や適性について考える授業	30.9	29.9	32.8	31.8	29.1
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	28.2	26.2	29.0	26.0	31.8

注1) 「よくあった」+「ある程度あった」の割合。注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。
 注3) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。注4) ()内はサンプル数。

反対に、学年の上昇とともに比率が下がっている項目も2つあった。「大学での勉強方法を学ぶ授業」(「1年生」36.2% > 「2年生」32.1% > 「3年生」23.8% > 「4年生」22.5%、以下同)、「高校で勉強する教科の補習授業」(36.1% > 34.3% > 30.5% > 27.5%)がそれである。こうした学習技法を学ぶ授業や補習授業は主に1年生に配置されるため、記憶に新しい低学年のほうが高い比率を示すとも考えられるが、特に学習技法の授業などは最近になって広がってきたことの表れとみることできる。

つづいて、学部系統別の違いを指摘しておきたい。表3-1-11によると、学部系統による差異が大きく、それぞれの専門分野のカリキュラム構造や教育方法の違いが反映されているといえる。とりわけ、「理工」「農水産」「保健その他」といった理系学部と、「人文科学」「社会科学」「教育」といった文系学部で大別される。

第1に、理系の学部はいずれも、「実験や調査の機会を取り入れた授業」が全体平均に比べて著しく高い結果を示した(「理工」64.4%、「農水産」70.4%、「保健その他」71.3%)。これに対して、「人文科学」(35.4%)、「社会科学」(29.7%)ではきわめて低い値であった。しかし反対に、

「少人数のゼミ・演習形式の授業」に関しては、理系学部の値は顕著に低く(「理工」46.0%、「農水産」47.2%、「保健その他」43.8%)、「人文科学」(71.2%)、「社会科学」(73.4%)は高い値を示した。また、理系学部では「高校で勉強する教科の補習授業」の比率も高い傾向にあり(「理工」41.3%、「農水産」46.4%、「保健その他」44.8%)、理系の専門教育にとって、高校までの知識の習得が不可欠であることがうかがえた。

第2に、文系学部のなかでも「人文科学」と「教育」では、全体平均よりも高い項目がいくつか共通してみられた。「毎回、授業内容に関するコメントや意見を書く授業」(「人文科学」80.2%、「教育」89.6%、以下同)、「教員と学生が授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業」(56.6%、58.8%)、「上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーション(議論・質問・対話など)がとれる授業」(25.7%、32.9%)、「グループワークなどの協同作業をする授業」(62.0%、73.4%)、「ディスカッションの機会を取り入れた授業」(56.2%、67.8%)、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」(58.6%、64.3%)が、これに該当する。要するに、教員と学生および学生同士のコミュニケーションを促

表3-1-11 授業の経験（全体・学部系統別）

（%）

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)	その他 (149)
高校で勉強する教科の補習授業	32.1	25.5	27.5	41.3	46.4	44.8	24.5	27.5
大学での勉強方法を学ぶ授業	28.7	33.8	29.3	26.7	24.8	21.6	25.9	25.5
少人数のゼミ・演習形式の授業	62.9	71.2	73.4	46.0	47.2	43.8	66.5	63.1
実験や調査の機会を取り入れた授業	45.1	35.4	29.7	64.4	70.4	71.3	48.3	57.7
教室外で体験的な活動や実習を行う授業	32.4	27.8	23.3	30.9	67.2	59.0	60.9	53.1
毎回、授業内容に関するコメントや意見を書く授業	68.6	80.2	68.3	55.5	72.0	64.3	89.6	76.5
教員と学生が授業時間内にコミュニケーション （議論・質問・対話など）がとれる授業	46.1	56.6	46.3	36.2	36.8	42.1	58.8	55.0
上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーション （議論・質問・対話など）がとれる授業	19.7	25.7	19.2	15.0	15.2	14.8	32.9	22.8
インターネットやメールなどを利用して、授業以外でも教員と学生と コミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業	40.6	43.5	41.1	39.0	39.2	35.0	41.3	41.6
学期末以外にもテストが課される授業	78.2	75.5	77.4	83.5	79.2	77.1	72.0	73.1
学期末以外にもレポートが課される授業	82.7	81.8	79.1	86.0	88.8	84.5	90.9	85.3
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	40.7	48.3	32.9	40.3	50.4	52.0	45.5	48.3
学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業	43.8	51.1	40.8	40.3	45.6	44.2	46.9	48.4
グループワークなどの協同作業をする授業	53.3	62.0	47.4	49.0	44.0	63.9	73.4	64.4
ディスカッションの機会を取り入れた授業	46.7	56.2	45.6	34.6	32.8	55.4	67.8	57.1
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	51.0	58.6	47.5	46.6	43.2	53.3	64.3	61.7
コンピュータやインターネットを活用する授業	69.7	72.0	64.7	76.4	58.4	64.4	74.8	77.8
自分の進路や適性について考える授業	30.9	33.8	30.3	29.1	21.6	29.3	36.4	37.6
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	28.2	35.2	28.8	24.7	20.0	25.4	19.6	25.5

注1)「よくあった」+「ある程度あった」の%。注2)○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) — は全体よりも5ポイント以上、= は10ポイント以上低いものを示す。注4) ()内はサンプル数。

進するような授業、学生が自分たちで調査研究して発表したり、議論したりするような授業が、「人文科学」と「教育」で高い比率となっているのである。とりわけ、「教育」はいずれの項目も10ポイント以上上回り、著しく高い値が特徴的といえる。これに対して、「保健その他」を除いた理系学部では、これらの項目は全体平均より低い傾向にあった。「保健その他」の場合は、医学部などでPBL（Problem-based Learning＝問題解決学習）を導入する大学が多いことから、おそらくグループワークやディスカッションの値が高くなっているものと考えられる。

第3に、「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」は、文理を問わず、「農水産」（67.2%）、「保健その他」（59.0%）、「教育」（60.9%）において顕著に高い結果を示している。職業実践や現場との結びつきの強い分野では、こうした体験活動や実習が重視されていることがみとれる。

この他、「人文科学」では「語学以外の授業で、外国語で行われる授業」の値が全体より高く、「教育」では、「学期末以外にもテストが課される授業」の比率は低いが「学期末以外にも

レポートが課される授業」の比率は高いなど、各学部系統の特性がうかがえる結果となった。

全体をまとめれば、その教育効果のほどは別としても、授業のなかで学生の主体的な参画を促すための授業内容・授業方法の導入がある程度進んでいることが、学生自身の授業経験の回答結果から確認できる。とりわけ、文系の学部系統、なかでも「教育」系ではこうした取り組みが顕著である。もちろん、こうした傾向がさらに広がるべきだという見方もできるだろう。しかしながら、ここで挙げたような授業形態・授業方法を、一律にどの授業でも適用することが望ましいとはかぎらない。すでにみえてきたように、文系学部と理系学部での授業の差異は明らかである。また、同じ文系学部、理系学部のなかでも各学部系統によって習得すべき知識・技能、育成すべき能力が異なることはいうまでもない。専門分野によって教えるべき内容が異なれば、それぞれの授業の目的や内容に照らして、最も適した授業形態・授業方法を検討することが重要だといえるだろう。

成績

大学の成績については、「優・良・可」のみで回答した学生（62.8%）が、「GPA」を記載した学生（37.2%）をはるかに上回った。「優・良・可」方式では平均して「優（A）」が4.7割を占め、「GPA」方式では平均値は2.7であった。



あなたのこれまでの大学の成績について教えてください。なお5段階評価の「秀、優」の場合は「優（A）」と教えてください。

学生の学修成果の達成度を測る1つの指標として、大学でこれまでにどの程度の成績をとっているかをたずねた。この成績はあくまで自己申告ではあるが、他の設問との関連をみていく際の客観的指標としてとらえられる。回答は「優（A）」・「良（B）」・「可（C）」・「不可（D）」および「未修得」のそれぞれの割合（ただし、5段階評価については、「秀」・「優」を「優（A）」とみなす）、あるいはGPA（小数点第1位まで）でたずねた。

GPA（Grade Point Average）とは、米国で一般的に用いられている成績評価方法の1つである。授業科目ごとに5段階で評価し、評価の高い順から4、3、2、1、0と評価点をつけ、それらに単位数を乗じた合計値を求め、単位当たりの平均を算出した値である。現在、大学の成績評価の厳格化が求められるなか、履修科目全体の成績を数値化して履修指導や学習支援に役立てるGPAの導入が推進されている。

表3-1-12と表3-1-13をみると、有効回答数4,070名のうち、「優・良・可」で回答した学生が3,344名（82.2%）、「GPA」が1,515名（37.2%）であった（複数回答）。すなわち、両方を併記した学生が789名（19.4%）存在する。「優・良・可」のみを記した学生は2,555名（62.8%）であり、全体としてみれば、「優・良・可」の方式だけを用いるところがいまだ優勢といえる。

全体の成績の分布については、「優・良・可」

方式では、「優（A）」が平均して4.7割と半分近くを占め、成績は良好な状態にあるようである（表3-1-12）。「GPA」方式では、平均値は2.7で、3.1以上が34.5%と約3分の1を占めている（表3-1-13）。米国では、卒業要件として2.0以上を求めるのが通例だが、その点からみれば、2.0以下の比率が18.5%（より正確には、2.0未満は14.3%）であることはやや問題だといえる。米国流にGPAを退学勧告や進級・卒業判定の基準として運用するケースは日本ではまだ少ない。そうした運用まではいかなくとも、本来、こうした学力不振の学生にきめ細かな学修指導を行うためにGPAが活用されるべきであって、当該学生にも適切な対応がなされていることが望ましい。

この成績を属性別に検討すると、第1に、性別では、男子よりも女子のほうが成績が良いことがわかる。これはふだんの授業への取り組みが、女子のほうがまじめなことの表れでもある*1。表3-1-12によれば、「優（A）」の割合は「男子」（4.3割）＜「女子」（5.2割）と女子で高く、表3-1-13によれば、GPA3.1以上が「男子」（28.7%）＜「女子」（43.4%）と10ポイント以上差がついた。ただし、「女子」はGPA1.0以下で男子をやや上回っているため、GPAの平均値でみればそれほど大きな差とはなっていない。

第2に、学部系統別では、「教育」の成績が良いようである。「優・良・可」方式では、「優（A）」の割合が「教育」（5.5割）＞「全体」（4.7

*1 第3章第1節「大学での授業への取り組み」（p.88、表3-1-5）を参照。

*2 第3章第1節「大学での授業への取り組み」（p.90、表3-1-7）を参照。

割)で最も高い(表3-1-14)。GPAについては、学部系統によってサンプル数に多寡があるため断定的なことはいえないが、平均値が「教育」(2.9) > 「全体」(2.7)と高い結果を示した(巻末の基礎集計表参照)。

もう1点特徴的なのは、「教育」と「保健その他」で「不可および未修得」の割合が低いことである。表3-1-15によれば、「不可および未修得」が「0割」、すなわち全くなかったという回答が7割を超えている。「保健その他」の学

生がまじめに勉強し、「教育」の学生が積極的にグループワークに参加する傾向がみられることはすでに述べたが、両学部では「履修登録した科目は途中で投げ出さない」という回答もまた全体より高かった*2。このように成績については、学生自身が単位取得に対してまじめであることも影響しているだろうし、職業資格の取得のために必修科目が多く、カリキュラムが過密であって単位を落とせない状況にあることも関係していると考えられる。

表3-1-12 これまでの大学の成績：「優・良・可・不可および未修得」の割合(全体・性別)(割)

	全体 (3,344)	男子 (1,978)	女子 (1,366)
優(A)	4.7	4.3	5.2
良(B)	3.0	3.1	2.8
可(C)	1.8	2.0	1.6
不可(D)および未修得	0.7	0.9	0.6

注) ()内はサンプル数。

表3-1-13 これまでの大学の成績：GPA(全体・性別)(%)

	全体 (1,515)	男子 (925)	女子 (590)
平均(単位:GPA)	2.7	2.6	2.8
3.6~4.0	11.3	9.8	13.6
3.1~3.5	23.2	18.9	29.8
2.6~3.0	22.4	21.3	24.1
2.1~2.5	24.6	29.3	17.3
1.6~2.0	10.8	12.6	8.0
1.1~1.5	3.4	4.0	2.5
1.0以下	4.3	4.0	4.7

注1) < >は10ポイント以上の差があるものを示す。

注2) ()内はサンプル数。

表3-1-14 これまでの大学の成績：「優・良・可・不可および未修得」の割合(全体・学部系統別)(割)

	全体 (3,344)	人文科学 (706)	社会科学 (1,275)	理工 (762)	農水産 (95)	保健その他 (259)	教育 (126)
優(A)	4.7	5.1	4.4	4.4	4.7	5.0	5.5
良(B)	3.0	2.9	3.1	2.9	3.0	2.8	2.8
可(C)	1.8	1.5	1.9	2.1	1.9	2.0	1.3
不可(D)および未修得	0.7	0.7	0.8	0.8	0.6	0.5	0.4

注1) 学部系統別の「その他」は省略した。

注2) ()内はサンプル数。

表3-1-15 これまでの大学の成績：「不可および未修得」の割合(全体・学部系統別)(%)

	全体 (3,344)	人文科学 (706)	社会科学 (1,275)	理工 (762)	農水産 (95)	保健その他 (259)	教育 (126)
平均(単位:割)	0.7	0.7	0.8	0.8	0.6	0.5	0.4
10割	0.3	0.3	0.4	0.1	0.0	0.4	0.0
9割	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
8割	0.3	0.2	0.4	0.1	0.0	0.9	0.0
7割	0.2	0.2	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0
6割	0.5	0.8	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0
5割	1.0	1.1	0.8	1.5	0.0	0.9	0.0
4割	1.0	0.8	1.3	1.0	0.0	0.4	2.7
3割	2.5	2.4	3.0	2.8	3.6	0.0	1.8
2割	6.5	4.9	7.8	8.3	8.4	2.7	1.8
1割	33.3	32.8	35.2	38.0	30.1	21.4	22.3
0割	54.4	56.4	50.2	47.6	57.8	73.2	71.4

注1) 学部系統別の「その他」は省略した。

注2) ●は全体よりも10ポイント以上高いものを示す。

注3) —は全体よりも5ポイント以上、—は10ポイント以上低いものを示す。

注4) ()内はサンプル数。